

火星

平成二十五年八月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

日が月をゆつくり送る余り苗

巫の麻衣となりし木の間かな

夏の色なり斎串ゆく男山

ぼうふりの水に日の射す祓かな

ありなしの風が暈を一夜鮓

神の威を借りし横がほ羽抜鶏

神杉のうしろ蚊柱立ちゐたり

奥の間へ夜風のとほる星迎

夫のせて来よまるぼちやの茄子の馬

きらきらと雨の過ぎゆく盆肴

太白星

和太鼓の桴の突きたる春の雲
和太鼓に寺の名の濃し芝桜
うぐひす谷一丁目藪囀れる
袋角やはらかさうな眠さうな
銀山のほたるぶくろに声入るる
硝子越しに雨見て体操アマリリス
もも色の息を吐きたる水母かな

杉浦典子

浜口高子

青梅を盥にあけし音かんばし
青葉木菟の道尽きにけりカテドラル
万緑やまぶしきものに池の芯
かはせみの一尋逃げし三步寄る
平らなる道につまづく花夕顔
鯉跳ねてマスト傾げる朝の風
子子の跳ね通しゐて振れ合はず

火星作品

山尾玉藻選

失うて母近くなる桐の花
八幡大山文子

子規に見え糸瓜の苗のけふの風

すれ違ふ僧に酒の香麦の秋

山風に戸袋鳴れり更衣

平茶碗大きき回す夏野かな

研修の蒲団積まるる時鳥
宝塚小林成子

大伽藍列柱すでに西日中

まくなぎをはらへば匂ふ酒の町

ふるさとは棕櫚の花掃く真昼どき

ずんだ餅提げ空港の薄暑かな

スケッチのときをり触るる茗荷の子
宝塚山田美恵子

雨コートの母の抱へる花菖蒲

滝殿のしぶきに近き祝酒

よき声の田植機同士すれちがふ
田植機の胴しづもれる月の影
八十八夜魚道に風の集まれる
はためけるもの美しき端午かな
宇治の水澄みまさりきし夏花摘
桐咲いて山がかりなる鯨墓
島影に日の巡りきし麦埃
瓢苗夕べの雨によごれけり
宝塚蘭定かず子

からすみを炙る卵の花くたしかな
みなづきの莫塵に延べある高野槇
とほき訃報にマロニエの高く咲く
茹でこぼすものに磯の香半夏生
囀の空へ山伏跳びゆけり
夕蛙帯をきれいにたたみけり
葉桜や四角く撫づる牛の貌
猪の穴順にのぞいてゐる暮春
わが影のうれしさうなり花は葉に
大和郡山城 孝子

選のあとに

山尾 玉藻

か。「茗荷の子」の愛らしいひびぎが功を奏し、何でもない景を微笑ましいものとしている。

はためけるもの美しき端午かな 深澤 鱧

端午の節供は青葉若葉の候、五月晴の空で色鮮やかな鯉幟や吹き流しが爽風に鳴りはたたき、それを仰ぐころも晴れやかとなる。「はためけるもの美しき」とは端午の候の天と地が織りなす大自然への賛美。

瓢苗夕べの雨によごれけり 蘭定かず子

「土によごれけり」ではなく「雨によごれけり」の表現に注目したい。この表現、地面から僅かな丈で立つ弱弱しい瓢の苗を示すだけでなく、夕方の雨の程度を想像させるに十分な力がある。土に汚れた瓢の苗を前にしてこれは安易に言えそうで言えない表現であり、その点に感心する。

わが影のうれしさうなり花は葉に 城 孝子

思いがけぬ病を得て大手術に耐え抜かれた作者であるが、死を意識されなかつた筈はなからう。今は葉枚の下を歩まれるまでに回復され、自分の影をしみじみ愛しく見詰められている。「うれしさうなり」の率直さが全てを語る。

衛兵の地を蹴り止まる雲の峰 河崎 尚子

失うて母近くなる 桐の花 大山 文子

お姑さんを亡くされた作者であるが、掲句を読む限り生前お二人の間に何らかの確執があつたと推察される。遠くから眺める「桐の花」は美しく、人のところを懐かしく優しい思いにしてくれる。「何でも句にすると叱られるかも」と作者は案じるが正直な句は読み手のところに必ず伝わる。

研修の蒲団積まるる 時鳥 小林 成子

山中の施設での研修風景。研修が始まり人の姿は見えず、部屋の隅に参加者の蒲団が少々荒っぽく積み上げられている。頻りに鳴く「時鳥」の声ががらんとした部屋にひびく。

スケッチのときをり触るる 茗荷の子 山田美恵子

茗荷の子をスケッチする手が時おり止まり茗荷の子に触れている様子である。先つちよにほどけ始めた花びらが見え、それが見えるように自分の方へ少し向きを変えたのだろう

外国詠か、国内詠なら自衛隊駐屯地でまみえる景か。「地を蹴り止まる」できびきびとした挙動が鮮明に浮かび上り、その景が遠方に聳える「雲の峰」とよくひびき合う。

ひかりつつ毛虫流るる立夏かな 坂口夫佐子

毛虫が毛の一本一本で水を弾きつつ一つの光となつて流れていく。毛虫には気の毒ながら思いがけなくも美しい景。些末な景が「立夏」の季語を得て揺るぎない一句となつた。

くらがりに水の流るる袋角 田中 文治

奈良飛火野の鹿苑の前を奥へ進むと鬱蒼とした森となり、昼の闇が辺りを被う。暗がりよりする水音に応えるかのよう、袋角の脈打つ音が聞こえるようである。

(以下略)

恒星圈

山田美恵子

緑蔭の身動きとれぬ桶の鯉
シユー生地の焼けきし匂ひ更衣
鳧鳴くや高き石碑に出水線
雨だれにつつまる昼の籠枕
目盛の伝言板の女文字

松山直美

山本耀子

麦秋や声の大きな下校の子
母の日のつぎつぎ乾く濯ぎもの
夏蝶にならひ智恵の輪くぐりけり
赤き目の亀の向きむき梅雨兆す
法然の廟にまくなぎ払ひけり

手摺なき橋たどりくる夏の蝶
更新の夫の捺印薄暑なる
手付籠の笹百合一花明易し
ふるさとの持ち重りきし夏蜜柑
軒菖蒲薩摩隼人は一年生

村上留美子

蘭定かず子

更紗地のエプロン干さる薄暑かな
袋掛けされ何の木か分からざる
震災の結願桜実となれり
はじめかみの花の辺手籠の媪かな
青梅雨や会津藩上の墓のまへ

ゆるやかに雲のつながる実梅籠
仕返しの草矢背中に感じをり
地卵の籠が框に明易し
いつまでも浜に男ら早星
雀らに庭石菖の日暮あり

獅子座

山尾玉藻推薦

田中文治

涼野海音

波音のやうな風音小鳥の巢
海鳥の横顔ならぶ春の暮
有給を取りて虚子忌に参じけり
ラジコンのへり上がりゆく大夏野

井上淳子

石舞台に鳩が胸置く朝ぐもり
山吹きやダムに現はる通学路
ラフティングのしぶきのしぶく子供の日
ジャグリングの赤白黄色こどもの日

福本郁子

まくなぎや逆さに干されある箒
卯月波潜水艦の接岸す
酒封じの墓をかへしぬ夏つばめ
園丁の鉢忙しき梅雨の入

西村節子

日本の土の匂ひぞ燕の子
少年の汗ふりかかると大太鼓
耀あとの箱の匂ひや夏に入る
頷きしあと淋しかり蜘蛛の糸
母の耳うとくてさとし青簾
亀の子のひとつ増えぬし日向かな
硝子戸に子らの掌のあと夏立ちぬ
しばらくは山頂にゐし黒揚羽

林範昭

鰻萬へ研師来てゐる朝ぐもり
風青し大講堂の高御座
早桃熟れ高円山に昼の月
緑さす直哉旧居の女中部屋

根本ひろ子

天王寺の実梅誉めける紀州弁
父の馬曳かれゆきけり夏の暮
山腹の棚透かし見る袋掛
夏山の腹に影濃きへりコプター